c113-042-007-001
©2022 YHAL, YIPP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

昭和34年(1959年)8月15日　土曜日　第26424号　(日刊)

朝日新聞
夕刊
朝日新聞東京本社
東京都千代田区有楽町二丁目三番地
© 朝日新聞東京本社 1959

灘自慢の酒
國冠
灘 魚崎 久星本家醸

核融合

実験装置、見送り

原子力委 湯川博士が裁断

核融合反応の中型実験装置を三十五年度から原子力予算で建設しようとしていた計画は、原子力委員会の湯川核融合専門部会長の裁断によって一応中止となった、と十五日発表された。

湯川核融合部会長

同計画は核融合専門部会、原子力研究所などが中心となって予算約十億円、三十五年度から三カ年計画で一千万度の高温発生装置、ステラレータ2型を製作しようとしていたが、学術会議の核融合特別委員会（委員長伏見阪大教授）などから「まだ基礎研究を行うべき段階である」と強く反対され、今年はじめからもめていたもの。

去る十日の原子力委核融合専門部会と学術会議の核特委の合同会議でもきまらず、湯川部会長、伏見委員長、菊池原子力委員、蠟山原子力委員、蠟山原研副理事長に一任され、湯川博士が他の三人の意見を聞いて断を下したわけである。

この結果、原子力委員会としては明年度は原子力研究所に約三千万円の予算を組み、海外の研究調査と基礎研究に当らせるほか、プラズマ研究のため電気試験所に三千七百万円、理化学研究所に二千万円、民間研究に一億円余の補助金を出すに止める模様で、わが国の核融合研究はこれで大きく後退したことになる。

今日の問題

生れ出た〝民衆〟

敗戦の日から十五年目、まわりを見わたせば、めいめいがよくここまで生きてきたという感慨が、だれしも胸にわくだろう。

この復興と建設は、せんじつめれば、やはり国民すべての大きな努力の結実である。戦後の年月には、いろんな苦い思い出もあり、みにくい事件もあったが、今日の復興の姿は、日本人の勤労が積み築いた動かぬ事実として、受取っていいかと思う。民族としての自信を、そこに見出すのに十分な成果であろう。

敗戦の年の八月十日から十五日まで、政治の中枢部は、大ゆれにゆらいだ。切の権威が、積木のくずれるように、けて行った。そのなかから、日本に初て〝民衆〟というものが、生れ出たのである。開戦も、また戦争の終結も、国の意思とは、全く無関係に行われたと ってよい。〝民草〟はいたけれども人としての民衆存在しなかっといえるかもれない。開戦に併せ襲われた民草は、然の勅語放送にもまた驚倒した。思すべていじらしい限りであった。

日本には、すでに戦争を知らぬ子供ちが、どんどんと成長している。そのろまだ子供だった人たちにとっては、開の記憶もむしろ楽しい思い出だけが っているかも知れない。殊に、満州事

月末こ実

もダメなので、十七日迄で開通の見込みはない。

▽第四号国道（東京―宇都宮）第六号国道（東京―水戸）いずれも支障なし。

▽第十八号国道（東京―長野）碓氷峠の手前で道路決壊のため不通になっていたが、十五日午前一時、片側交通で開通した。完全修復は二、三日後の見込み。

▽第二十号国道（東京―甲府）十

原茂（長野三区）櫃兼次郎（岐阜二区）安田敏雄（参院・山梨地方区）柳田秀一（京都二区）の五氏を任命する。

一、十七日水害対策特別委員会を招集して各地の被害報告を検討し、十八日、党の現地調査団を派遣する。

一、現地調査団、急対策を決め備費の支出、など立法措置に、水害対策時国会を開く。

自民に水

自民党は第七号